

## 「永遠の0」の功績

坂井三郎さんが見たという学生の話。「昔、日本とアメリカが戦争をしたんだ。」「で、どっち勝ったの？」

ここまでくれば、無知を通り越して単なるバカだけれど、マスメディアに「洗脳」されている人にとっては、笑い事ではないかもしれない。また、大東亜戦争の記憶も薄れかけていて、日本は「侵略国家」だと、国民にも思わせ、頭の悪い首相に世界中に向かって言わせてみたり、悪逆非道の国だと信じ込ませたり、まあ無茶苦茶なマスメディアの態度である。あと10年もすれば、元特攻隊員（特攻要員も含む）はいなくなるかもしれないし、戦争体験者も同じである。そういう時代に、戦争や特攻のことを、改めて特に若い人に知らしめてくれた。さらには、2001年の9.11のテロリストがニューヨークのWTCビルに突っ込んで、これと特攻隊とを混同させるような論調で、特攻隊はテロリストだなどとしたりげに自称ジャーナリストや評論家が言うのを完全に否定してくれたことも、功績だろう。この小説の主人公は、零戦と特攻隊である。（零戦と特攻隊については別の稿で改めてまとめます。）

海軍を選んだのは正解で、これがもし陸軍のことだったら、あまりの悲惨さに途中で読むのをやめる人が出たかもしれない。秦郁彦さんがいう「戦死者のおよそ4割が広義の餓死者」という話もすんなりはいつてくる、ガダルカナル戦。ここでは有能なパイロットが大勢散華した。これが海軍の最後のまともな(?)戦いになった。

映画にしたのも成功だったようだ。はじめ60代（この人々も戦争を直接知っているわけではないが幼少期にその雰囲気に触れた人はいるかも知れないが）が中心の購買層が、10代20代に広がった。そのため、文庫本で300万部とか400万部という数字になったのだと思う。

読んでおられない方のために、あらすじを書けば、独身の30歳のフリー・ジャーナリストを目指している女性と、司法試験浪人と称するフリーターの姉弟が、自分たちの実の祖父が特攻隊員として敗戦間際に亡くなっていて、いわば自分たちのルーツさがしを始める。数人の生き残りの零戦パイロットや特攻隊員（特攻要員）に話をしてもらおうのだが、この中でさえ、毀誉褒貶がある。祖父をけなす人もあれば、恩人と考えている人もいる。

「戦後、特攻隊員は、さまざまな毀誉褒貶にあった。国のために命をなげうった真

の英雄とたたえられたこともあったし、歪んだ狂信的な愛国者とののしられたときもあった。いずれも真実をついていない。世間は、マスメディアの報道を鵜呑みにして、考えることをしなかった。彼らは、英雄でもなければ、狂人でもない。逃れることの出来ない死をいかに受け入れ、その短い生を意味深いものにしようと悩み苦しんだ人間だ。私はその姿を間近に見てきた。彼らは家族のことを考え、国のことを思った。彼らは馬鹿ではない。特攻作戦で回天の望みがないことくらいは知っていた。……隊員に選ばれて、取り乱すような男は一人もいなかった。もちろん、出撃に際して泣きわめくような男もいなかった。痩せ我慢などではない。すでに心が澄みきっていたのだ。」……疑うなら硫黄島を見よ。援軍のない孤島で、何週間も立てこもり結局は無駄な抵抗に終わったのである。それでも米軍に一矢報い大都市への空襲を遅れさせた功績は否定できない。米軍が4日間の予定で侵攻したが、36日間も抵抗を続けた。もう生死を超越している。

当時、「世界一」であった零戦の優秀さと熟練搭乗員の質の高さ。パイロットたちは、ほとんどが下士官や兵である。彼らの生命を塵芥のように扱いながら、士官たちは優雅な生活を送っていた、理不尽な世界である。(坂井三郎さんが経験した話で、戦後ある大佐と同席したとき、この元大佐が「考えてみれば海軍生活はよかったですな」といった。当然坂井さんは反発する。「それは士官だけの話で、われわれ下士官は使い捨てにされていた」というような言葉で否定した。)

特攻隊員の心情。特攻を命令した高級参謀たちのいい加減さ。自らを安全なところに置いて兵のみを死地に追いやっていく卑劣さ。責任をとらない卑怯さ。そして、一部の人は知っていたが、ほとんどの日本人が知らなかったことになるが、特攻に断固反対した美濃部正少佐、進藤三郎少佐、国賊呼ばわりされながら特攻機をださなかった岡嶋清熊少佐。桜花による特攻。野中五郎少佐は、「こんな馬鹿な作戦はない」と部下だけを出撃させるに忍べず、みずから出撃した、など実話がちりばめられている。最初の特攻の関行男大尉らの掩護機としてすさまじい対空砲火の中、特攻を成功に導いた、ガダルカナルでは「ラバウルの魔王」と米軍から恐れられた西澤廣義飛曹長が、任務後にグラマンF6Fヘルキャット(零戦を上回る性能を誇る)を2機撃墜してセブ島の基地に降り立った。零戦から降り立った西澤飛曹長のまとう異様な殺気に居並ぶパイロットたちは、誰も声をかけられなかったという。で、その翌日マバラカット

基地にもどろうとした西澤らに基地の指揮官は零戦を残して置けと命令し、その輸送機が敵に撃墜されてしまう。・・・・優秀なパイロットがどれほど大切なものかを知らない指揮官というか、上層部の思考の硬直ぶり以外の何物でもない。あのガダルカナルで生き残ったパイロットの大切さを理解していない。この掩護で、生涯初めて列機を失った。

先的美濃部正少佐など、指揮官 80 人余のいる中で、死を賭して敢然として反対する。色をなして怒鳴りつけた上官に対して「ここに居られる皆さんに自ら突入できる方がいるのか」そして「練習機（複葉の布張り、いわゆる赤トンボ）まで特攻に出すのは言語道断。嘘だと思えば赤トンボに乗って攻撃してみられるとよい。私が全部零戦で叩き墜してみせる」といった。練習機の最高速度は零戦の半分にも満たない。これに 250kg の爆弾を搭載して体当たりをするのである。敵は、迎撃戦闘機と対空砲火の嵐である。・・・・目標まで到達しない可能性が高い。

美濃部少佐は、日本でより海外で高い評価を得ている。日本人が知らないのは、マスメディアの怠慢だという。

坂井三郎さんの「大空のサムライ」や「零戦の真実」など一連の著作に書かれているが、搭乗員を大切にしないのは、海軍全体でみられたことである。また、ミッドウエー海戦など淵田美津雄さんや奥宮正武さんらがすでに記録しているものもあるが、史実がある限り、突拍子もない創作はできないし、する気もなかったようだ。だから、実話と創作をうまく適合させた。

淵田さんは、日本人の国民性の欠陥による、と語っているが、「希望と現実とのギャップを埋めることができなかった。合理性を欠くわが国民性は、やることなすことが行き当たりばったりで、熱しやすく冷めやすい。漫然と事に臨み、敗れてのち初めて名論卓説を述べる」・・・・これではまるっきり、当時も今も新聞の姿そのものではないか。ミッドウエーでは、南雲司令長官はその器ではなかったことがはっきりしているし、源田実も「鎧袖一触ですよ」などと緒戦の勝利に酔い痴れて、万全の対策を立てることができなかった。「運命の五分間」と称しているが、実際には、護衛の零戦を 1 機飛ばしておくだけですんだものを、まだかまだか、などといいながら無駄な時間を費やしてしまった「間抜けな五分間」だと、坂井さんも書いている。このあたりも行き当たりばったりの「国民性」によるものだと考えられる。そんな程度の感覚

で作戦を立てられたら、兵士たちの死は無意味になってしまって、浮かばれないだろう。日露戦争の時代からほとんど進歩することなく、大鑑巨砲主義がまかりとおり、山本五十六も源田実も航空専門家と称していたくせに、ずぶの素人のいう「戦闘機不要論」を認めるなど、現場を知らない、的確な情勢判断ができない司令官や参謀など、何の役にも立たない。この間に貴重なパイロットの訓練が途絶えてしまって、あとで慌てても時すでに遅しであった。

南雲長官の逃げ腰に対し、山口多聞少将は、戦いのたびにさらなる攻撃を意見具申しているが、容れられなかった。そして空母飛龍と運命をともにした。……のちの話になるが、米軍が山本五十六長官機を撃墜させるに至った理由のひとつに、山本の作戦の傾向は大体わかったからそのまま戦死させることはなかったのだが、あとに優秀な司令官がくれば厄介なことになる。そこでニミッツは部下に「山本より優秀な司令官があとを継ぐことはないか」と尋ねると、「山口多聞少将がいますが、彼はミッドウエーで戦死したから、あとは心配しなくてもいい」と答えたという。

ましてや、特攻隊員が犬死にだったなどと考えるほうが狂っている。それをいうなら、サイパンの軍人や民間人、さらに沖縄戦での民間人の活躍は、どうなるのか。硫黄島に籠もった栗林中将をはじめとする守備隊も犬死にだったというのだろうか。彼らは、1日でも1時間でも家族の住む日本を米国が蹂躪することを先延ばしにすることが目的だったはずだ。この戦争に勝てるなどと思っていた守備隊の兵士はいなかっただろう。

しかし、それもこれも「国民の選んだ道」だったはずだ。それを煽ったのが当時なら新聞とラジオである。なにもかも信じきってしまう国民もよくないが、うまく騙して誘導したのはマスメディアである。その象徴的な存在が朝日新聞なのであるが。彼らが戦後になって「誤っていた」などと表明したわけでもない。知らぬ顔をしてがらりと態度を豹変し、戦前は狂っていたのだ、とか民主主義万歳、マッカーサー万歳などと国民を啓蒙する、教えてやるなどという思い上がりが露骨すぎる。これは現在もそうで、テレビが加わったからより一層国民を騙しやすくなっている。それがオピニオン・リーダーだと信じ込んでいるのが、僕には「信じられない」。……たとえば、パーマメントはやめましょう、などと群れをなしてつるし上げをしていたおぼちゃんらは、どうなったのだろうか。謝ったという話も聞かない。

再び引用する。

「戦後多くの新聞が、国民に愛国心を捨てさせるような論陣を張った。まるで国を愛することは罪であるかのように、(中略) その結果はどうだ。今日、この国ほど、自らの国を軽蔑し、近隣諸国におもねる売国奴的な政治家や文化人を生み出した国はない。」

というようなわけで、数え切れない(100冊や200冊ではきかない)ほど出版されている本をすべて読むなど、事実上不可能である。(ボクは、これから書く予定の稿のために、少なくとも40冊以上の本を読んだ。) もっと書きたかっただろうが、この本1冊で大筋の流れは理解できる。国防や愛国心。国家、共同体(自分の住んでいる、あるいは仕事をしている周辺の環境)、夫婦、家族、兄弟姉妹の間の愛情や絆など、もろもろのことを考えるためにも、若い人には是非読んでもらいたい一冊ではある。

2014.06.25.

追記

インターネットを見ていると、この作品を坂井さんの「大空のサムライ」などからの転用ばかりだ、と否定し、日本は「侵略国家」なのだから、などとほざいているのがいる。けなすのはいいが、いい年齢をして自分が洗脳されているのを理解していない。素直に「小説」として読み進めばいいだけのことである。ノンフィクションなどとはどこにも謳っていないのだから。……もう一度言いますが、日本を「侵略国家」としているのは、朝日新聞をはじめとするマスメディアだけで、彼らが大好きな、金に汚いマッカーサーでさえ、「侵略」を否定していて、A B C D包囲網に対する日本の正当防衛だと言っているのです。戦争を始めるように仕向けたのは米国であり(直接には、国務長官のハル・ノート)、その元凶は日本嫌いのセオドア・ルーズベルトである。これは、ハワイやフィリピンの領土が欲しかっただけで、それには日本が邪魔だっただけのことである。親切そうに日露戦争の講和をまとめたが、あの日本海海戦に完勝した日本が獲得した領土はごく僅かで賠償金はないという条件だった。米国の対日戦略であるオレンジ・プランは、日露戦争の翌年に計画されている。

戦争をせずに日本がすべての条件を呑めば、日本は永遠に「植民地」にされていただろう。敗れたけれど、意地も見せられた。世界では、「特攻隊」は、日本での評価を思うとき、賞賛のほうがはるかに多いのです。